



Data 2023-14

監督: 大友啓史
脚本: 古沢良太
出演: 木村拓哉/綾瀬はるか/宮沢氷魚/市川染五郎/和田正人/高橋努/浜田学/本人大輔/森田想/見上愛/増田修一朗/斎藤工/北大路欣也/本田博太郎

👁️👁️ みどころ

木村拓哉も御年49歳！織田信長を演ずるには、まさに旬！てなわけで、東映創立70周年記念作品、総製作費20億円のビッグプロジェクト作品として本作が完成！2022年11月の岐阜信長祭の騎馬無者行列には46万人もの見物客が押し寄せる大人気に！しかし、タイトルとされている“バタフライ”とは？

司馬遼太郎の『国盗り物語』を読んでいるZ世代の若者の数は？斎藤道三や濃姫（＝帰蝶）を知っているそれは？桶狭間に始まり、本能寺に終わった信長の生涯は、めっちゃ面白い。数々のエピソードを繋ぎ合わせるだけでも映画として十分成立するが、本作にみる大胆な“新説”は如何に？

映画は何でもあり！それは認めるものの、本作が提起する、明智光秀謀反についての新説(?)の是非は？本作については、大ヒットするか否かとともに、その学術論争(?)にも期待したい。

こんな人気大作にケチをつけてはダメ。それが映画評論家やライターが安全に生きていくための知恵だが、私はあえて異論を！しかし、私の本作に対する評価は星3つ！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■東映創立70周年記念作品！総製作費20億円！■□■

東映創立70周年記念作品、そして総製作費20億円のビッグプロジェクト作品が、これ。2023年のNHK大河ドラマ『どうする家康』で松本潤が演じている若き日の徳川家康（松平元康）はあまりかっこ良くないが、本作で木村拓哉が演じる織田信長がかっこいいのは当然。2022年11月、木村拓哉が本作の信長姿で参加した岐阜信長祭の騎馬武者行列は46万人もの見物客が押し寄せる大人気になったからすごい。

したがって、2023年1月27日公開の本作への期待も国民的なものだ。一面全体を使った新聞紙上の宣伝でも、「まだ見ぬ世界へ。」「驚くほどの感動を映画館で」「この映画は<伝説>となる。」「織田信長と濃姫が生きた激動の30年を描く感動超大作」等の見出しが躍っている。また、そんな本作について映画評論家やライター諸氏が書いた評論は当然、絶賛、絶賛、また絶賛！疑問点を述べたり、文句やケチをつけたりする評論はどこにも見当たらない。しかし、『SHOW-HEY シネマルーム』を50冊以上出版し、20年以上、弁護士兼評論家としての映画評論活動を続けている私の本作についての評価は全然ダメ！せいぜい星3つ。

■□■バタフライとは？Z世代は『国盗り物語』を知ってる？■□■

そもそも『レジェンド&バタフライ』のバタフライとは一体ナニ？これは、レジェンド＝伝説＝織田信長と結びれた斎藤道三の娘・濃姫に、帰蝶という呼び名をちょっとおしやれに言い換えたもの(?)だが、今時の若者は、そもそも斎藤道三や、その娘・濃姫のことを知っているの？その理解のためには、司馬遼太郎の『国盗り物語』を読むのが一番だが、それを読んでいる若者はまずいないのでは？

本作で濃姫役を演じた綾瀬はるか演技はさすがと思わせるものだが、斎藤道三や、濃姫の存在すら知らない今時の、いわゆる“Z世代”と言われる若者たちが、本作のような織田信長と濃姫の恋物語を、もし史実と考えてしまえば大変なことだ。本作の脚本を書いたのは、『どうする家康』と同じ古沢良太氏だが、NHK大河ドラマも本作もなぜこんなバカバカしい(?)脚本になっているの？TVの視聴率や映画の興行収入をあげるために、若者受けを狙うのはわからないでもないが、『どうする家康』の脚本も本作の脚本もあまりにあまり！私はそう思うのだが・・・。

■□■信長モノの面白さはどこに？ラブストーリーの是非は？■□■

織田信長を主人公にするドラマは、NHKの大河ドラマをはじめとして、たくさんある。それは、桶狭間の戦いをスタートとし、本能寺の変をラストとする彼の一生が、誰よりも波乱に富んでいるからだ。今ドキの、世界史にも日本史にも疎い若者だって、①桶狭間の戦いと②本能寺の変くらいは知っているだろう。

そこで、導入部における、うつけの殿(＝信長)と、“まさにこれぞ斎藤道三の娘”を徹底させた濃姫との婚儀のストーリーが終わると、本作は桶狭間の戦いからスタートさせていく。そして、その後は、①上洛に伴う浅井長政との因縁、②比叡山焼き討ち、等々のエピソードを絡めながら、信長(レジェンド)と濃姫(バタフライ)とのラブストーリーを軸として描き、ラストは本能寺の変へ！なるほど、なるほど

■□■明智光秀謀反！その理由を巡る学術論争に新説登場！■□■

明智光秀はなぜ織田信長に謀反し、なぜ本能寺の変を起こしたの？それには諸説があるが、本作は“新説”を掲げて、そこに“新規参入”！その新説とは、通説の真逆をいくもので、①光秀は比叡山を焼き討ちし、僧侶のみならず女子供を皆殺しにした信長の“魔王”

ぶりに敬服していた。②しかるに、濃姫の病気で弱気になり、人間味を増してくる信長に疑問を持った。③そこで、自らが信長に代わる“魔王”になるために……。というもののだが、その説得力は？論拠は？

現在 NHK では、10時ドラマ“大奥”がヒットしているが、これは男女逆転の発想から生まれた面白いドラマになっている。しかして、本作の新説は如何に？

■□■信長も龍馬と同じく、大きな船での南蛮行きを夢を？■□■

信長も豊臣秀吉と同じように（それ以上に？）好奇心が強かったらしい。そのため、早くから鉄砲（の威力）に目をつけていたし、楽市楽座による自由な国内取引や、海外との交易も考えていたらしい。そして、上洛した後は、南蛮人やキリスト教、そして、ぶどう酒や洋装にも興味を持っていたらしい。しかし、その時点で、後の坂本龍馬のように、自分自身も大きな船に乗って南蛮に行ってみたいと思っていた、という新説（？）は如何なもの？もっとも、本作のそれは、信長自身の夢ではなく、濃姫が語る夢をそのまま自分のものにした感が強いが、そうなると余計に？？？“歴史上の if”はいくらでも可能だし、映画でそれを表現すれば面白いものになる可能性は高いが、本作のそんな if（新説？）の是非は？

ちなみに、本日2月1日、令和4年のキネマ旬報社が選ぶベスト10と個人賞が発表され、『ケイコ 目を澄ませて』が日本映画の第1位になった。また、主演女優賞には岸井ゆきの、助演男優賞には三浦友和が選ばれたから、私はそれには納得。しかし、本作がもし大ヒットし、興行収入を上げることになれば、それは喜ぶべきこと？ひょっとして、それは、若者の危機、日本の危機かも……？

2023（令和5）年2月2日記